
バカと兄貴と召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと兄貴と召喚獣

【NZコード】

N4136BA

【作者名】

直井刹那

【あらすじ】

この小説は『バカとテストと召喚獣』の一次創作です。オリ主は明久と幼馴染であり、頼れる兄貴的存在である。そして明久が双子の兄という設定になり、明久の妹と明久と幼馴染のオリ主が秀吉、雄一、ムツリー二等のFクラスメンバーや翔子や愛子、優子などのAクラスメンバー達と楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

プロローグ

僕たちが文月学園に入学してから2度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇つている。

別に花を愛でるほど雅な人間じゃないけど、その眺めには一瞬目を奪われる。

はずだつたのだが・・・・・・・・

明久「遅刻だあ―――っ――！」

なぜかと言つと、俺たちは初日の始業式からいきなり遅刻しそうになつてゐからだつた。

何故こんな事になつたかといふと

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

健「咲耶、そろそろ時間だから明久を起こしてきてくれるか」

俺は明久の家に住ませて貰つていて

いつものように朝食を作つてまだ寝ている明久を
明久の双子の妹の咲耶に頼んで起^くしてもらつっていた。

月火「わかつたよ健君」

そして今日は文月学園2度目の中学校の始業式の日である。

咲耶「お兄ちゃん朝だよー起きないとー」

明久が朝いつものように起^くされていたのが始まりだ。

始業式当日の今日の朝方までゲームをしていたらしく全然起きなくて
やつと起きたと思ったら何故か昔の姉の制服を着ており、
また着替えるという作業をしていて気づいたら時間がヤバいということだ。

・・・・・・・・・・・・

健「これというのも、お前が寝坊して間違つて玲さんの制服なんか
着るからだぞーーー！」

明久「う、うめん。ゲームのキリがつくなくてさ」

健「昨日あれほど言つただろ！」

せめて始業式の日ぐらいは遅刻したくなかったのに」

といつわけで俺達は学園へと続く坂道を登つてゐる。

長い坂道を登りきると

西村「吉井兄妹、神崎、遅刻だぞ」

「ドスのきいた声に呼び止められた。

明久「あ、鉄じ——西村先生、おはよ(?)ぞ」

健「鉄人ちっす！」

咲耶「西村先生おはよ(?)ぞ」

鉄人「吉井妹おはよう。それと吉井兄、今鉄人って言わなかつたか
？」

おお、鋭い。

明久「ははっ、氣のせいですよ」

鉄人「ん、そうか？それと神崎は堂々と鉄人というな

健「反省はしてるけど後悔はしない！」

鉄人「後悔もしろ！……まあいい」

あついいんだ。

鉄人「それよりお前ら普通に『おはよつゝぞれこます』じゃないだろ」「

明久・健「今日も肌が黒いですね」

鉄人「……お前らは遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

明久・健「そつちでしたか。すみません」

鉄人「まったくお前らは……まあいい。ほら、受け取れ」

鉄人が俺達に封筒を差し出してくる。
宛て名欄には大きく俺達の名前が書いてあった。

咲耶「お兄ちゃんはどのクラスだった？」

明久「どうだろ？ 健と月火は頭良いからAクラスじゃない？」

咲耶「…………どうだろ？」

咲耶は言葉を濁しながら言ひ。

……と、明久が封筒を開けるのに苦戦している時、

鉄人「吉井兄。今だから言つがな。

俺はお前を去年1年見てきて『もしかすると吉井兄はバカなんじやないか？』

なんて疑いを抱いていた

明久「それは大きい間違いですね。そんな誤解をしてるようじゃ、更に『節穴』なんて渾名を付けられちゃいますよ?」

鉄人「ああ、振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気が付いたよ」

そこで俺達が封筒を開けると

『吉井 明久……Fクラス』

『雲雀 健……Fクラス』

鉄人「お前は『大馬鹿』だ」

明久「つてちょっと待つてください!まあ僕はFクラスかもしれないと思つていたけど」

健「自覚はしてたんだ」

明久「……まあ。つてかなんで2人がFクラスなんですか?」

咲耶「それはねお兄ちゃん。

私、試験中に具合が悪くなつて途中退席したからFクラスな

の

健「で、俺はその咲耶を保健室から連れて行くため教室から出たからFクラスになつたんだ」

明久「……そうだったんだ」

鉄人「まあ俺個人としての意見だが、あの時の神崎の行動は良かつたと思つてゐるぞ」

健「ありがとうございます」

鉄人「さあ、なら教室に向かうんだ」

こうしてボクたちの一年目の高校生活が、幕を開けた。

キャラクター紹介？

よしいあきひさ
吉井 明久

性別 男

身長 原作と同じ

性格 原作とほぼ同じ。

見た目 原作と同じ。

得意科目 日本史 世界史 保健体育（3科目ともAクラス並の点数）

苦手科目 得意科目以外（F～Eクラス並の成績）

召喚獣の装備 黒の改造学ランにいう格好。

武器は日本刀。腕に籠手の装備。

腕輪 まだ不明。

備考 觀察処分者なのは原作と変わらないので操作は学園一上手い。

原作と同じく鈍感。

咲耶のことになると敏感になる。

また咲耶のことになると悪鬼羅刹と言われた雄一以上の力を發揮する

吉井咲耶
よしこさくや

性別 女

身長 163cm

性格 とても優しい女の子で

一度決めたことはやり通すと言つ精神を持つ。

見た目 見た目は化物語の月火で星型の髪留めをしている。

髪の色は明久と同じ。胸はDカップ。

得意科目 現代文 古典 日本史 世界史

苦手科目 保健体育

召喚獣 和服の格好をしておりに日本刀（小太刀）を腰に下げている。

腕輪 まだ不明。

備考 明久の双子の妹。

少し病弱体质。

成績はAクラス上位レベル。

性別 男

身長 178cm

見た目 fateに出でくるクー・フーリン（ランサー）の髪の色を黒にして

目の色も黒く染めた感じ。

性格 普段は温厚で優しく頼れる兄貴だが怒るとかなり怖くなる。

得意科目 英語・古典・化学以外（Aクラス並）

苦手科目 英語・古典・化学（Fクラスレベル）

召喚獣の装備 黒スーツに白のワイシャツ、赤のネクタイという格好。

武器は方天ほうてん画戟がげき

腕輪の能力 まだ不明

備考 觀察処分者ではないが明久に少し劣るぐらいの召喚獣の操作技術を誇る。

武術は雄二以上の運動神経がある。

家事能力も高いが料理は明久に劣る。

明久と咲耶の家に居候中。両親は海外で生活中。

そこで昔から吉井家と仲が良かつたので一緒に住ませてもらつている。

自己紹介

明久「……なんだろ？、このばかデカい教室は」

咲耶「ねえ、ここ本当に教室なの？」

高級ホテルのロビーにしか見えないんだけど」

健「個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、

その他もうもう豪華な品々…本当に勉強する環境か？こりは」

明久「…教室の設備に色々と突っ込みたいけど、

これ以上の遅刻はマズイし、僕達も教室に行こうよー。」

健「そうだな」

そうして俺たちははFクラスに向かう。

明久「ねえFクラスの設備って、どんなのだと思う？」

Fクラスの設備か？うーん…

健「純和風に、畳にちゃぶ台に座布団とか？」

明久「あ、それでお茶菓子と抹茶が用意されてて、壁に巻物が掛かってたり？」

抹茶よりお茶菓子が先に出てくる辺り、さすが明久だと思つ。でも…

咲耶「Aクラスのドリンクバーが異常なだけだからそれはないと思

うよ?「

明久「そつか…じゃあ、あまり期待できないね」

咲耶「最低クラスの設備に期待する事自体間違つてるけどね」

明久「あはは、確かに。あ、着いたよ」

明久の言つ通り、その教室には 2・F と書かれたプレートが掛かっていた。

咲耶「じゃ、私から入るね」

明久「了解」

ガラツ

月火「ごめんなさい少し遅れました」

雄二「早く座れ!…」このウジ虫や…つて咲耶!?
どうしてFクラスに!/?はつ!/?」

明久「おはよう雄二。で今、僕の妹の咲耶のこと何て言つたのかな?
…………ウジ虫つて聞こえたんだけど僕の気のせいかな」

明久は雄二に殺氣を向ける。

雄二「な!? 明久かい、今のは言葉のアヤだ。
決して咲耶に向けて言つた訳じゃない。だ、だから許してくれ」

明久「……ならいいけど、次はないよ」

雄二「コクコク！」

健「相変わらず明久は妹に甘いな」

と、その時。

福村「えーと、ちょっと通してもらいますかね？」

不意に背後から霸氣のない声が聞こえてきた。

そこには寝ぐせのついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンが居た。

福村「それと席に着いてもらいますか？ H.Rを始めますので」

学生服も着てないし、これで十代だったら詐欺って感じなオジサンだから、

この人がFクラスの担任なのか？ 鉄人じやなくて助かつた。

健「りょーかい」

明久「はい、わかりました」

雄二「うーっす」

咲耶「はい」

俺たちは人はそれ好きな席に向かう。

咲耶は明久の隣に座り、俺は明久の後ろの席に座った。

福村「えへ、担任の福村慎です、よろしくお願ひします。」

教壇に立つた福村先生は自己紹介をし、
黒板に名前を書こうしたがその手を止めた。
理由はチョークがないからである。

福村「皆さんに卓袱台と座布団は支給されますか？不備があつたら申し出で下さい。」

明久「これで不備がないって言つ人に会つてみたいよ」

健「それは俺も同感だな」

それもそうだろう。机と椅子はなく、あるのは卓袱台と座布団。
さらに天井にはクモが巣を作り、畳は痛み、窓ガラスは所々テープ
が貼られている。

もちろんそれに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我
慢してくださいか、
自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

福原「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願ひし
ます。」

スクツ

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しております。」

そのまるで男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。

だけど秀吉は男なんだがな…… 次はその前の少年が立つた。

康太「…………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年ー土屋康太だ。彼はムツツリーニというあだ名を持つているが本名よりもそっちの方が知名度が高い。秀吉と康太とは去年からの付き合いだ

島田「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。

あ、でも、英語も苦手です。趣味は 」

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女ー島田美波は一回区切り、

島田「吉井明久を殴る事です 」

島田が明久に向かつて手を振っている。
おい島田、明久が震えているぞ

咲耶「吉井咲耶です。

試験日に体調を崩してしまい試験を途中退席してFクラスになりましたが、
皆さん優しそうな方々なのでお兄ちゃん共々よろしくお願ひします」

本当にできた妹だなあ。
明久とは全然違うよな。

F「咲耶ちゃん良い子やなあ

F 「咲耶 ゃんかわいいなあ」

F「咲耶ちゃん結婚してほしい」

おい誰だラブコールしたやつ?

明久がカツダーを取り出して殺氣出してるぞ

淡々と皆が自己紹介をしていく。今度は明久に回ってきた。

明久「コホン。えーと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね」

次の瞬間、

「……………。」

野太い男の大合唱。

咲耶「お、お兄ちゃん……」

明久「ごめん咲耶…………失礼、忘れてください。

「それと呼取が、んは僕の娘にならうが
僕に取り入つても意味はないのでとりあえずよろしくお願ひ
します」

「……………」

明久がそういうと皆が絶叫している。

おつ、次は俺の番だな。

健「神崎健だ。これからよろしくな。好きなことはゲームと食べる事だ！」

先に言つておくが俺の親友の明久と咲耶に手をだしたヤツは

「

ガシャン

僕は仕込み棒を取り出し構えると

健「殺すからな。ということだ。よろしく頼むわ！」

F「…………りょ、了解です」「」「」

Fクラスの皆は俺の仕込み棒を見て大人しくなった。

そこへ

?「あの、遅れて、すいま、せん。」

F「…………えつ?」「」

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

『試験戦争』をやつてみない？

福村「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」

姫路「は、はい！　あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします！」

途中から尻すぼみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

F「はいっ、質問です！」

姫路「あ、はいっ。なんですか？」

F「何でここにいるんですか？」

傍から見れば失礼な質問だが、ほぼ全員がそう思っていた事だった。彼女は容姿も人目を引く程でテストでは1桁の順位に名を連ねている学力の持ち主でもある。

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

姫路「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は〇点扱いにされると
いう厳しいテストである。

F 「そういうえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに

F 「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

姫路の言い分を聞いて、1人がそう言いました。
それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

F 「俺は弟が事故に遭つたと聞いて、実力を出し切れなくて」

F 「黙れ1人っ子」

F 「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F 「今年一番の大嘘をありがとう」

その様子を見て、俺は一言。

健「……想像以上にバカが多いみたいだな」

それを聞いて、明久はうんうんと頷いた。

姫路「で、では、今年1年よろしくお願ひしますー！」

姫路は逃げるよろよろと、雄一の近くの空いてる席に着いた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突つ伏してしま
う。

雄二「よう姫路、体調は大丈夫か?」

姫路「えーっと…、あなたは…」

雄二「坂本だ。坂本雄二。宜しく頼む」

姫路「あ、姫路です。宜しくお願ひします」

深々頭を下げる姫路。「一 ゆーべー」「からでも彼女の育ちの良さが伺えるといつものだ。

雄二「とこひで姫路。体調の方はもう良いのか?」

明久「あ、それは僕も気になる」

明久が気になり姫路に声をかけた

姫路「あ、明久君!？」

明久の顔を見て、瑞希が驚いた。

雄二「姫路、明久が不細工ですまん」

姫路「そつ、そんな事より、吉井君は全然不細工ではありませんよ?」

明久「え?」

姫路「目もパツチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……」

雄二「まあ確かに、悪くはないかもな。そういうえば、俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

雄二「その言葉で明久は嬉しそうに、瑞希は驚いて、俺はまさかと言つた様な表情に。

明久「え？ それって？」

姫路「そつ、それって一体誰ですか！？」

明久の声を遮るかのように、瑞希が声を荒げた。それも必死そうな表情のオマケつきで。

雄二「確か、久保……利光だったか？」

健「やつぱりか」

久保利光 性別（／オス） 現在Aクラス所属

咲耶「お兄ちゃん元気出して」

雄二「おい明久、さめざめと泣くな」

健「ようにもよつて男に恋愛感情持たれてるなんてなると思つぞ？」

雄二「……まあ、確かにな」

パンパン！

福村「はいはい。その人たち、静かに」

バキイツ！ パラパラパラ……

福村「してください……ね？」

本人としては、軽くたたいたつもりだろう。
だが、壊してしまった事は事実の為、少々気まずそつた態度に。

福村「え）。代えを持てきますので、皆さんは自習をしていく
ださいね」

健「どんだけ酷い設備なんだよー？」

福村「これがFクラスです」

福村教諭の台詞に、何度もかの改めて設備のひどさを理解させられる面々だった。

明久「うん……ねえ雄二、ちょっと良い？」

雄二「あ？」

明久は雄二を伴い、廊下へ。姫路が怪訝そうな顔をして見送り、俺
に問いかけた。

姫路「吉井君と坂本君、どうしたんでしょうか？」

健「何だ、明久が気になるのか？」

姫路「え？ いつ、いえ、そういうわけでは……」

健「ふーん、じゃあそういうことにしてくれよ」

俺は2人が出て行った廊下をちらりと見て、すくっと立ちあがる。

秀吉は俺を見て。

秀吉「なんじゃ、またお主ら3人で悪だくみかの？」

健「さてな、どうだろ？ でも面白い事になりそつだ」

秀吉「やれやれ……まあお主らうしいの？」

互いに笑いあって、俺は1人気取られない様廊下へ。

雄二「んで、話ってなんだ」

明久「この教室のことだよ」

雄二「Fクラスか想像以上に酷いな」

明久「Aクラスは見た？」

雄二「ああ凄かつたな。あんな教室は見たことないな」

明久「そこで僕からの提案、『試合戦争』をやつてみない？」

健・雄二「戦争……だと（だつて）？」

明久「うんーって健！？ いつの間に？」

健「明久こういう時は俺も混ぜろよな。水臭いぜ」

明久「うん、ごめん」

健「で、『試合戦争』するつて？」

雄二「…何が目的だ？」

明久「もちろん！ 咲耶と姫路さんのためだよ！」

あんな教室にいたら咲耶の体調が崩れちゃうかも知れないじゃないか！？」

雄二「そうじつけとか。まあ俺もやろうと思つていたしな」

健「そういう雄二は何で試合戦争をやろうと思つたんだ？」

雄二「世の中学力が全てじゃないってそんな証明をしてみたくてな。それにAクラスための秘策も思いついた」

そういうと雄二は教室に入つて行つたので俺と明久も教室に入った。

そして先生が戻ってきて再び自己紹介を再開した

須川「須川亮です。えー、趣味は……」

再び再開された自己紹介。

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原先生が坂本に声を掛けた。

福村「えーと、坂本君キミが最後ですよ。クラス代表でしたよね？
前に出てきてください」

雄一「了解」

そう言い雄一は立ち上がり教卓の前に向かつた

雄一「Fクラス代表の坂本雄一だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

さて始まるか

雄一「そしてAクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

雄一「不満はないか？」

F『『『『大アリじゃあつ！…』』』

不満大爆発だ。

雄一「だろう？俺だって不満だ。

このクラスの代表として大いに問題意識を抱いている

雄一は頷きながら同意する。

かねと、あがりから不満の声があがり始めた。

F『いへり学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求するー。』

F『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！あまりにも差が大きすぎるー。』

F『やうだやうだー。』

引き継ぐつに坂本は口を開いた。

雄一「みんなの意見はもつともだ。

そこで、これは俺の代表としての提案なんだが

雄一は一呼吸おくと

雄一「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ

雄一は戦争の引き金を引いた

俺はそれをふつと笑い

健「面白くなつただせば」と呟いた

J「この扇書をば『観察処分者』だー！」

雄一「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ」

F「そんなの勝てるわけがないだろ?」

F「JRE以上設備が落ちたらどうなるんだ」

F「姫路さんがいたら何もいらない」

F「咲耶ちゃんがいるだけで僕は満足です」

F「咲耶ちゃん結婚してく」

バキッ

F「フベッ！」

F「す、すみません」

明久「言つたよね。咲耶に手を出したらって

雄一「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

F「無理に決まつてやるじやん」

F「さう言われても何の根拠もないしなあ・・・」

雄一「根拠ならあるや。」のクラスには勝つことのできる要素が揃っている

雄一は自信ありげにそう宣言した

雄一「それを今から証明してやる！

おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いているんだ

康太「…………！」

そういうと康太は素早く立ち上がり首を横に振った。

姫路「え？」

姫路さんは顔を赤く染めスカートを押さえた。

雄一「土屋康太　こいつがあの有名な寡黙なる性職者だ」

そういうと康太は首を横に振った

F「馬鹿な…奴がそうだというのか？」

F「見ろーまだ証拠を隠そうとしているぞ…」

F「ああ、ムツリの名に恥じない姿だ」

雄一「それに姫路と吉井咲耶の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

咲耶・姫路「え？私ですか？」

この2人は学年トップ10に入っているほどの実力がある。
去年の成績だと姫路が学年次席で、咲耶が4位だったかな?

雄一「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

F「そうだ!俺達には姫路さんと咲耶さんがいるんだ!」

F「彼女達ならAクラスにも引けをとらない!」

雄一「それに木下秀吉だつている」

秀吉「ワシもか?」

F「演劇部のホープ!」

F「確かAクラスに木下優子っていう姉がいただろ」

雄一「そのほかにも島田もいる」

島田「えつウチ?」

雄一「島田は数学だけならBクラスに匹敵するだけ実力がある」

島田「頑張るわ」

雄一「それに神崎健もいる。皆も聞いたことがあるはずだ

『文月の狂犬』を『イツがその狂犬だ!』

F「なんだと!?」

F 「切れたたら相手をボコボコにするまで許さないって言ひ」

F 「あの狂犬がこの学校に！しかも同じクラスかよー…？」

雄二 「それが今は俺達の味方だ」

F 「おお、 そうだな」

F 「怖いものなんて無いな」

雄二 「ただ、 明久と咲耶の2人に手を出したら知らないがな」

F 「うつ、 そ、 それは・・・」

雄二 「それに健もAクラス並の実力を持つ。当然俺も全力を尽くす」

F 「坂本つて小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ」

F 「確かになんかやれそつな気がしてきたぞ」

F 「これはいけるんじゃないか！？」

F 「よし…やつてやる！じゃねーか！！」

今教室の士気が高まつていったが

雄二 「それに吉井明久だつている」

とこうとシーンと教室内は静まりかえった。

F 「誰だよその吉井明久って」

F 「それ以前にそんな奴らこのクラスにいたか？」

明久「雄二！何でそこで僕の名前をだした！？」

せっかく上がった士気が台無しだよね！――

明久が文句を言つと、雄二が睨み付けてきた。

雄二「そうか、知らないのなら教えてやる。

こいつの肩書きは『観察処分者』だ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136ba/>

バカと兄貴と召喚獣

2012年1月13日18時52分発行